

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：14201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24800034

研究課題名(和文) 体育の学習集団論の再構築に向けた研究方法モデルの開発と運用

研究課題名(英文) Development and the use of the study method model for the reconstructing of the learning group theory of the physical education

研究代表者

加登本 仁 (Kadomoto, Hitoshi)

滋賀大学・教育学部・講師

研究者番号：40634986

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、小学校体育授業における学習集団の形成過程を分析しうる新たな授業研究の方法を開発すること、及び開発した研究方法を用いて小学校体育授業を対象とした事例研究を行うことを通じて、新たな体育の学習集団論を構築するための基礎的な知見を得ることであった。

本研究では、Y. Engstromの「活動システム」の理論を体育授業の解釈に援用し、ボール運動の授業における学習集団の形成に影響を与える要因を事例的に考察した。その結果、子どもたちが抱える「内的矛盾」を子どもたち自身に直面させ、対話を通して集団的に解決することが学習集団の形成に肯定的な影響を与えることが事例的に明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to get fundamental knowledge to build a learning group theory of new physical education through developing the method of the new class study that I could analyze the formation process of the learning group in the elementary school physical education class into and performing the case study for elementary school physical education classes using the study method that I developed.

In this study, I quoted the theory of "the activity system" of Y. Engstrom for the interpretation of the physical education class and considered a factor to affect the formation of the learning group in the class of the ball motion for an example. As a result, I let "the internal contradiction" that children had face children oneself, and it became clear for an example that what I solved through talks collectively had an affirmative influence on the formation of the learning group.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：体育授業研究 研究方法論 学習集団論 活動理論

### 1. 研究開始当初の背景

近年、平成 20 年告示の小学校学習指導要領解説体育編において、「改善の基本方針」として「集团的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成すること」が示されるなど、子ども同士の肯定的な人間関係の育成に関して、体育に大きな期待が寄せられている。

これまでに、体育授業で子ども同士の肯定的な人間関係を意図的・計画的に育成するための教材や学習指導プログラムが開発され、その有効性が実証されてきたものの、「技術認識」を媒介とした学び合いにおいて、集団が質的に発展していく過程やその要因を実証的に明らかにした研究はあまりなされていない。学習集団の形成過程に影響を与える要因を実証的に明らかにするためには、研究方法の開発と事例研究の蓄積が喫緊の課題である。

### 2. 研究の目的

本研究では、小学校体育授業における学習集団の形成過程を分析しうる新たな授業研究の方法を開発すること、及び開発した研究方法を用いて小学校体育授業を対象とした事例研究を行うことを通じて、新たな体育の学習集団論を構築するための基礎的な知見を得ることを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究では、2 年間にわたり、活動理論に関する文献や質的授業研究法に関する文献、体育授業研究に関する文献を中心とした理論的考察による研究方法の開発と、開発した研究方法を用いて体育授業を対象とした事例研究の実施、さらに事例研究で明らかになった成果を通して研究方法の有効性を検討し、研究方法のさらなる精緻化を行う。そして、事例研究の成果から、新たな体育の学習集団論を構築する際の基礎的な知見を提出することとした。

### 4. 研究成果

平成 24 年度には、体育の学習集団の形成過程を解釈する枠組みとして、エンゲストロームの「活動システム」理論の有効性や限界について検討し、体育授業に適用させた授業研究の方法を提案した。

これまでの体育科教育学の先行研究を概観すると、子どもの学習過程を解釈する枠組みは、高橋ら(1991)や深見(2010)、野津・後藤(2011)によって提起されており、子どもの技能特性(技術的なつまずき)だけでなく、認知特性(認知的なつまずき)や行動特性、心情特性(社会的なつまずき)を複合的に捉える必要性が指摘されてきた。さらに、阪田(2012)のいうように、「子どもの学習は本来的に共同的性格を持っていると考えられ、協力や対立などを含め、教師はこの共同的性格をできるだけ引き出さなければなら

ない」ことから、学習集団の形成過程を解釈する枠組みには、授業における認識過程と集団過程とが相互に媒介しあうものと捉えるような理論的枠組みが求められることが明らかになった。

松下(2000)が述べるように、エンゲストロームが提唱する「活動システム」モデル(図1)は、「教科内容の側面」と「社会関係の側面」の両側面の関係を表現しているものと考えられ、学習集団の形成過程を解釈するための理論的枠組みとしての有効性が示唆された。

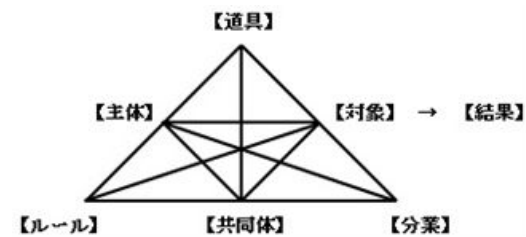


図1 活動システムモデル  
(Engeström, 1993, p.68 を一部改変)

筆者は、これらの理論的考察を経て、以下のように「活動システム」モデルを体育授業の解釈に適用する研究方法を提案した。すなわち、体育授業のなかで子どもは学習する内容としての「スポーツに関する知識(概念や法則)・認識(運動についての論理的、感覚的認識)・技術・戦術やルール・マナー、練習やゲームの運営のしかた、さらにはこれらの学習方法」(岩田, 1994)を媒介として「対象」(教材)に立ち向かい、「結果」としてそれら「道具」を変化・発展させていく。「共同体」は、同一の一般的対象を共有している多様な個人やサブグループのことであり、授業では「対象」を共有している教師や他のグループ、個人が含まれる。「分業」は、共同体のメンバーでなされる課題の水平的分割や、権力や地位の垂直的分割のことであり、授業では役割分担といった「課題の水平的分割」に加え、技能差や体格差、そして学級における指導・被指導といった権力関係が「垂直的分割」としてあらわれる。最後に、「ルール」は活動システムの中の行為や相互作用を抑制する明示的および暗黙的な規則、慣例、慣習を意味するものであり、授業における約束事や、スポーツでプレイを制限するための明示的なルールもあれば、苦手な人にはボールを渡さない方がよいといった、「共同体」のメンバーの中で暗黙的に共有されている慣習も含まれる。

また、エンゲストロームの「活動システム」モデルの最大の特徴は、「古い活動システムの記述と内的矛盾の分析」を経た「新しい活動システムのデザインと適用」という手続きが用いられる点にある(松下, 2003)。私たちは、この枠組みを用いて授業に潜む「矛盾」を明らかにすることで、その解決に向けて指導内容や方法を調整することができる。

エンゲストローム(1999)のいう「内的矛盾」の四つのレベルを体育授業に適用すると、次のように考えることができる。すなわち、教師は第一の矛盾として、各構成要素内の「内的矛盾」を分析する。例えば、子どもが教師の意図する「認識」(道具)を用いることができている場合、教師は意図する「認識」が子どものものになるよう発問や教具等の指導方法を改善したり、自分の意図した「認識」が適切であったかどうかを反省したりする。また、子どもたちの間で運動技能の低い者を疎外するような「ルール」が存在していれば、全ての子どもが活躍できるようなルールを提示したり、教科外活動における指導も含めた継続的な働きかけによって子どもたちの間に暗黙的に形成されている慣習に揺さぶりをかけたりする。次いで、教師は第二の矛盾として構成要素間の関係に目を向ける。先に示したように、子どもが「認識」(道具)に矛盾を抱えている場合、それは「教材」(対象)が適切でないこともある。また、「ルール」が抱える矛盾は「教材」(対象)によって引き起こされていたり、「分業」によって引き起こされていたりする場合がある。第三の矛盾は、「文化的により進んだ形式の中心的活動の対象」との間に起こる矛盾、例えば、戦術の原則を学ばせることを意図して教材化されたゲームであれ、教師の意識的・継続的な働きかけがなければ、子どもは勝利や得点を志向する「競技スポーツの論理」に支配された「活動システム」を展開することがある(図3・図4)。第四の矛盾となると、教師にはもはや体育授業の枠を越えた視野が要求される。すなわち体育授業にみられる「活動システム」を、他教科の授業や教科外活動、休み時間、あるいは家庭生活に至るまで、様々な「活動システム」との重層性のなかに位置づけ、複数の「活動システム」間の矛盾を分析するのである。

以上のように、本研究では学習集団の形成過程を解釈するための新たな研究方法を提案することができた。

平成25年度は、エンゲストロームの「活動システムモデル」を分析の枠組みとして援用することにより、フラッグフットボールの授業で子どもたちがどのような「活動システム」のもとで学習集団としての集団を形成させていくのかを事例的に明らかにすることを目的とした事例研究を行った。

筆者らは、小学校4年生で行われたフラッグフットボールの授業を対象とした。そして、抽出したA班について、授業の映像、及び音声から作成した授業の逐語記録と、中間のゲーム、およびまとめのゲームにおいて子どもが記入したゲーム記録用紙と、単元開始前と単元終了時に実施した「戦術的知識テスト」(坂田ほか、2009)毎授業後に実施した「仲間づくり調査票」(小松崎・高橋、2003)の4点の資料を収集し、フラッグフットボールの授業における「活動システム」を解釈した。

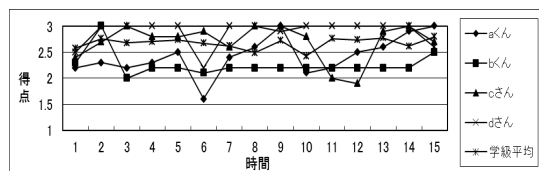


図2 「仲間づくり調査票」学級全体とA班の子どもたちの平均値の変化

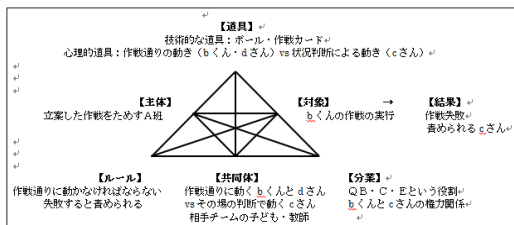


図3 6時間目のA班の活動システム

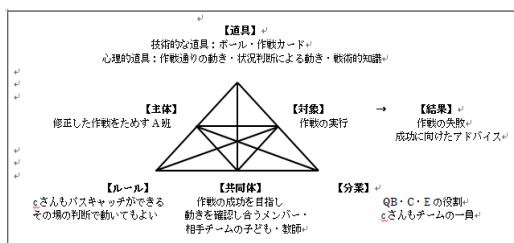


図4 14時間目のA班の活動システム

その結果、フラッグフットボールの単元前半から単元後半にかけて、A班の「活動システム」は肯定的な変容が解釈され、影響を与えた要因には、以下の4点が考えられた。

1) 子どもが授業のねらいである戦術的課題に向かえるように使用するボールを易しいものにした、基礎的なボール操作の技能を保障したりすること。

2) 一人ひとりの子どもの役割が明確になり、立案した作戦がゲームで生かされる必然性を持った教材を用意すること。

3) 立案した作戦をゲームによって検証し、よりよい作戦へ修正する時間を保障すること。また、作戦を修正するための戦術的知識を、集団思考によって深める時間を設定すること。

4) 教師は、集団スポーツに潜む「優勝劣敗・弱肉強食」といった文化的特性に配慮するとともに、子どもたちの間で生起している「内的矛盾」を適切に把握し、それに子どもたちを直面させ、対話を通して集団的に解決していくこと。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

加登本仁・下村奈央ほか(2012) 体育の学習集団形成における教師の指導性に

関する一考察．初等教育カリキュラム研究，1:59-68．査読無し

加登本仁(2013)まずは子どもを「見る」ことから．学校教育，1154:12-17．査読無し

加登本仁・中井俊之(2013)研究授業を担当する若手教師が直面する困難とその克服過程に関する活動理論的考察．初等教育カリキュラム研究，2:13-21．査読無し

加登本仁・大後戸一樹・木原成一郎(2013)小学校体育科のボール運動の授業における学習集団の形成過程に関する事例研究 エンゲストロームの活動理論を手がかりとして．教育方法学研究，39:印刷中．査読有り

〔学会発表〕(計3件)

加登本仁・大後戸一樹・木原成一郎(2012)体育の学習集団形成における教師の指導性に関する一考察．日本体育学会第63回大会，東海大学

加登本仁・大後戸一樹・木原成一郎(2013)小学校体育科のボール運動の授業における学習集団の形成過程に関する事例研究 エンゲストロームの活動理論を手がかりとして．日本教育方法学会第49回大会，埼玉大学．

Hitoshi Kadomoto (2013) An Activity theoretic approach to investigate the process to improve difficulties young, inexperienced teachers face in their experimental classes: Beyond the conflict between the traditional pedagogy and the reality of pupils. 日本スポーツ教育学会第33回大会，日本大学．

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加登本 仁 (KADOMOTO, Hitoshi)  
滋賀大学・教育学部・講師  
研究者番号：40634986

(2) 研究分担者 なし

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし

( )

研究者番号：